

平戸ツツジに関する研究

その成立について

田村輝夫
(園芸試験場久留米支場)

TAMURA, T.

Studies on the Hirado-azaleas, with Special Reference to their Formation

緒 言

植物分類上「平戸ツツジ」はリュウキユウツツジ (*Rhododendron mucronatum* G. Don) の別名として取扱われており、実用上は関西および九州の一部の間では園芸化された大輪性ツツジの一群を指すものとされているが本研究の開始以前においては平戸ツツジの全容はもとより平戸におけるツツジの実情については全く知られていなかった。先年来九州農試園芸部(現園芸試験場久留米支場)で現地調査を行ったところ極大輪性で花色、花形および葉形などに著しく変化に富んだ樹勢おう盛なツツジの一大群が存在していることが明らかとなった。調査の結果それらの中には

R. scabrum G. Don ケラマツツジ (奄美大島一琉球原生)

R. oomurasaki Makino オオムラサキ (園芸種原産地不明)

R. simsii Planchon シナノサツサ(シナ中南部原生)

R. ripense キシツツジ (中国, 四国原生)

R. mucronatum G. Don リュウキユウツツジ (園芸種, 原産地不明)

など1次種と見るべきものと、これらのある組合せの交雑に由来した生じたと考えられる2次的な form 或いは更に交雑しこと考えられる複雑な第3次的な form があることが明かとなった。このように自然植物の数種のものをおよぼす原種として殆んど人為を加えず自然交雑によつてけんらんたる1つの新しい園芸品種群を成立せしめたものと考えられる。このことは極めて稀な事例で、その成立の過程を明かにする目

的で本研究を行った。

1. 調査研究法

1. 個体調査と系統選抜

平戸島内のツツジの生育している庭園、屋敷跡、墓地、断がい等について調査を行った。主な調査項目は樹姿、枝条、春葉、秋葉、花期、一花房の花数、花形、萼形、花冠、花糸、葯等の形態、色彩、毛茸の状態などである。

2. 平戸ツツジの成立に関与したと考えられる原種についての調査

キシツツジ、モチツツジについては主な原生地並びに東京大学、京都大学、東京博物館等の腊葉を調査、ケラマツツジ、リュウキユウツツジ、オオムラサキ、シナノサツキについては栽培種と腊葉について調査した。

3. 種間交雑種の親和性

種間交配を行い、交配数、結数、発芽状態、生育状態、種間交雑種の特性等の調査を行った。

II 結果および考察

1. 平戸ツツジの成立に関与したと考えられる種は前記の5種のほかキリシマ、チョウセンヤマツツジがあることが判明したがモチツツジとチョウセンヤマツツジの影響は比較的少く、キリシマは花径を小さくしていると考えられた。

2. 平戸ツツジの諸形質とその変更原種の諸形質には個体毎に変異が認められるがそれは一定の限度があり種の特長となつているが平戸ツツジでは一花房の花

第1表 平戸ツツジの成立に関与したと考えられる原種の葉の特性

品 種	葉の形	長 さ	周 辺 の 毛	外側内部の毛
ケラマツツジ	卵形又は披針	7~12mm	長細毛まれに腺毛	殆どない
キシツツジ	披	10~15	腺毛まれに細毛	腺毛まれに細毛
リュウキユウツツジ	"	"	腺毛	"
シナノサツサ	半円~長半円	5	細毛	細毛
オオムラサキ	披針及び半円	5~15	細毛及び腺毛	細毛
モチツツジ	長披針	20~25	腺毛	腺毛
チョウセンヤマツツジ	卵~長卵	5~10	細毛	細毛

数、花の大きさ、花色、最上位の花弁に生ずる斑点 (blotch) およびボカシの色と形、雄蕊の数、花糸の長さ、蒴の形と花色・萼の形等には原種にはみられない形質を有するものが少なくない、1例を萼について記すると第1、2表の通りである。すなわち原種の萼の形は卵形又は披針形であるが平戸ツツジには長形で凹頭の萼や短い尖頭のものがあり、一つの萼で両形の萼片を持つ個体が少なくなかつた。

3. 平戸ツツジの分布

分布は旧町内が主で、また武家屋敷の分布とほぼ一致している。そこでは今なお自然実生が盛んに行われている。平戸以外でも鎮国以前の貿易港であつた長崎県大村市、鹿児島県坊ノ津なども平戸性ツツジが生じている。

4. 原種の平戸への伝来

平戸にケラマツツジ、シナノサツキが渡来したのは

第2表 平戸ツツジの萼の形質の変異 (1955~1957)

萼の形	萼周辺の毛茸									計	萼の外側内部の毛茸									計	
	細毛			細毛+腺毛			腺毛				細毛			細毛+腺毛			腺毛				無し
	少	中	多	少	中	多	少	中	多		少	中	多	少	中	多	少	中	多		
半 < 5mm	6	39	12	3	13	3	1	7	2	86	38	4		2	1		4	1		36	86
> 5~10	5	52	10	8	47	2	3	17	8	152	35	12	2	4	1		14	9		75	152
> 10~15			3	2	8			4		17	7	1	1	3	2		3				17
円 > 15計	11	94	22	13	68	5	4	28	10	255	80	17	3	9	4		21	10		111	255
半円 > 5		1				1				2	1									1	2
円+尖形 > 5~10	1	7	1	3	10	1	1	2	2	28	5	4		3	1	1	3	4		7	28
> 10~15	2	8		2	14			2		28	8	2		3	1		2	1		10	28
> 15計	3	20	1	6	24	2	1	5	2	64	15	10		6	2	2	1	6	5	18	64
尖形 > 5		2			3		2		1	8	3			1			2			2	8
> 5~10	4	12		5	28	2	2	13	9	75	21	4	3	3	3		19	7	6	9	75
> 10~15	4	15	3	5	43	3	5	44	19	141	18	7	2	7	8		20	38	21	20	141
> 15計	1	6	1	9	9	1	2	16	6	42	8	4		2	2		8	12	5	3	42
形 > 15計	9	35	4	10	83	6	11	73	35	266	50	15	5	11	13		49	57	32	34	266
総計	23	149	27	29	175	13	16	106	47	585	145	42	8	26	19	2	76	72	32	164	585

第3表 ツツジ属種間交配親和性

♀	♂	ツクシヤクナゲ	ヒカゲツツジ	トサノミツバツツジ	レンゲツツジ	サツキ (博多白)	サツキ (天来)	マルバサツキ	ヤマツツジ	キリヤマ	ミヤマキリシマ	フジツツジ	ケラマツツジ	リュウキュウツツジ	オオムラサキ	ウンゼンツツジ	モチツツジ	キシツツジ
ツクシヤクナゲ <i>R. metternichii</i>						●					△							
ヒカゲツツジ <i>R. keiskei</i>																		
トサノミツバツツジ <i>R. decandrum</i>					×			△	△	●	△	●	△	△	×	△	●	
レンゲツツジ <i>R. japonicum</i>		×	×	×			×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
サツキ (博多白) <i>R. indicum var.</i>		×	×	×	●		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
サツキ (天来) <i>R. indicum var.</i>		×	×	×	△		×	△	×	×	×	×	×	×	△	△	△	
マルバサツキ <i>R. eriocarpum</i>		×	×	×	×	○		○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	
ヤマツツジ <i>R. kaempferi</i>		×							○	○			○	○			○	
キリヤマ <i>R. obtusum var.</i>		×	×					○	○	○							○	●
ミヤマキリシマ <i>R. kiusianum</i>		×	×	●				○	○	○	○	○	○	○	○	○		
フジツツジ <i>R. tosaense</i>		×	×	×					○	○								
ケラマツツジ <i>R. scabrum</i>		×		●	●			○	○	●			○	○	○	○	○	○
リュウキュウツツジ <i>R. mucronatum</i>		×	×	×				○	○				○	○	○	○	○	○
オオムラサキ <i>R. oomurasaki</i>		×	×	×	×			○	○	○			○	○	○	○	○	○
ウンゼンツツジ <i>R. serpyllifolium</i>		×			×								○	○	○	○	○	○
モチツツジ <i>R. linearifolium macrosepalum</i>		×		×	×			○	○									○
キシツツジ <i>R. ripense</i>		×		●	×			○	○				○	○	○	○	○	○

- ×—種子のできないもの。
- △—種子に発芽能力のないもの。
- 種子は発芽するが、F₁植物は幼小のうちに枯死するもの。
- F₁植物の成育が非常に緩慢なもの。
- F₁植物が正常の成育をするもの。

第4表 原種の自家及種間交配親和性

♀植物	♂植物	交配年度	交配数	結果数	結果率
ケラマ	self	1960	9	0	0
〃	リュウキュウ	1956	5	5	100.0
〃	〃	1960	28	21	75.0
〃	〃	1961	13	8	61.5
〃	キ	1960	43	40	93.0
〃	〃	1961	17	16	94.1
〃	ムラサキリュウキュウ	1961	3	3	100.0
〃	モチ	1956	6	4	66.7
〃	ヤマツツジ	1960	25	17	60.8
リュウキュウ	self	1960	10	0	0
〃	〃	1961	21	0	0
〃	オオムラサキ(白妙)	1959	10	3	30.0
〃	オオムラサキ	1961	61	22	36.1
〃	ミヤマキリシマ	1960	32	15	46.9
〃	フジツツジ	1960	39	22	56.4
キ	シ	1958	10	3	30.0
〃	〃	1960	9	7	77.8
〃	モチ	1960	24	15	62.5
オオムラサキ(白妙)	self	1956	12	0	0
〃	〃	1957	21	0	0
〃	〃	1960	8	0	0
〃	シナノサツキ	1960	6	6	100.0
〃	モチ	1960	16	7	43.8
〃	フジツツジ	1960	27	12	44.4
〃	トサノミツバ	1960	29	0	0

第5表 平戸ツツジ「天祥」の自家および種間交配親和性

♀植物	♂植物	交配年度	交配数	結果数	結果率
天祥	self	1956	19	11	57.9
〃	〃	1960	5	4	80.0
〃	玉垂錦a	1956	2	2	100.0
〃	山錦b	1957	8	8	100.0
〃	御代の鳥c	1957	5	5	100.0
〃	文明星a	1957	2	2	100.0
〃	桃	1960	1	1	100.0
〃	〃	1960	1	1	100.0

a ベルザンアザレア

b オオムラサキの白花種×王冠 (Belgian azales)

c 久留米ツツジ品種

d 平戸ツツジ品種

第6表 平戸ツツジ「桃山」の自家および種間交配親和性

♀植物	♂植物	交配年度	交配数	結果数	結果歩合
桃山	self	1956	20	0	0.0
〃	〃	1956	5	2	40.0
〃	王冠a	1959	13	2	15.4
〃	歌姫b	1959	6	2	33.3
〃	福彦b	1959	4	4	100.0
〃	常春b	1959	4	4	100.0

a Belgian azalea

b 久留米ツツジ

第7表 平戸ツツジの成立に関与したと考えられる原種の開花期

種名	平戸	久留米
ケラマツツジ	4月下旬～5月中旬	5月上旬～5月下旬
オキムツツジ	4月中旬～4月下旬	4月下旬～5月上旬
リシユウツツジ	4月中旬～5月上旬	4月下旬～5月上旬
シユウツツジ	4月下旬	5月上旬
モチツツジ	4月下旬～5月上旬	5月上旬～5月中旬
チキヤマツツジ	—	4月下旬
ヤマツツジ	4月中旬	4月下旬
マツツジ	5月上旬～5月下旬	5月中旬～5月下旬

第8表 貯蔵方法の相異によるツツジの花粉発芽率の変化

— (1957) —

種名	貯蔵方法	貯蔵後の発芽率 (%)					
		0日後	10日後	20日後	30日後	40日後	50日後
ケラマツツジ (品種 緋げらま)	室内	44.5	5.8	4.8	0	—	—
	〃 乾燥	(5月4日)	4.7	1.9	0	—	—
	20°C 湿潤		0	0	0	—	—
	〃 乾燥		51.4	50.0	45.3	—	—
	5°C 湿潤		58.0	52.8	37.8	—	—
〃 乾燥		15.7	32.3	32.9	—	—	
オオムラサキ (品種 白妙)	室内	63.7	15.8	0	0	0	0
	〃 乾燥	(4月26日)	37.2	14.9	8.6	0	0
	20°C 湿潤		47.7	0	0	0	0
	〃 乾燥		58.4	81.4	63.4	42.9	6.0
	5°C 湿潤		47.2	52.2	53.7	3.4	0
〃 乾燥		65.2	43.2	15.6	8.0	0	
リュウキュウツツジ	室内	91.3	5.4	0	0	—	—
	〃 乾燥	(5月8日)	41.8	42.3	50.7	—	—
	20°C 湿潤		33.9	0	0	—	—
	〃 乾燥		92.7	91.3	92.5	—	—
	5°C 湿潤		93.4	58.9	8.8	—	—
〃 乾燥		94.4	91.8	75.5	—	—	
モチツツジ	室内	93.5	68.4	0	0	—	—
	〃 湿潤	(5月4日)	91.2	81.0	14.0	—	—
	20°C 湿潤		6.7	0	0	—	—
	〃 乾燥		87.5	0	0	—	—
	5°C 湿潤		95.3	95.8	87.4	—	—
〃 乾燥		94.5	94.4	96.5	—	—	

唐使時代および元録時代と考えられる。キシツツジは17世紀後半に原生地から舟便によつて持ち込まれたものと考えられる。

5. リュウキュウツツジは原生地不明の園芸種であるがキシツツジの原生地から採集して系統を栽培し比較したところ原生地のキシツツジの変異の中に包含され得ることが明らかとなつた。

6. オオムラサキは原産地不明であるが種間交雜によつて生じたものと考えられている平戸には本種に類似した個体が極めて多い。本種が交雜によつて生じたとすれば平戸の環境は最もその成立にふさわしい所と考えられる。

7. 平戸ツツジの成立に関与したと考えられる原種相互間には交雜親和性があり、原種には自家不和合性の高いものがある。それらの花期は比較的接近しており、花粉がある期発芽力を保持しているなどツツジ属

には種間交雜を生ずる要素を有していることが明らかとなつた。

8. 平戸は年間2000mmを越す降雨量があり冬季温暖で強粘質土壌であるが傾斜地形であるため土壤水分が適当に保たれ、強酸性土壌でツツジし生育に適し、ツツジの実生に適するコケ類がよく生育しており、ツツジの実生、生育には好適な環境となつている。

結 言

以上の如く平戸の古来海外交通の要港であつたためつつじの種類が各地から導入され、それらが交雜し、実生に適した環境に恵まれて生育し、これが繰返されて今日の美事な大品種群を作りあげたものと考えられる。これらの中には園芸的に極めて優れたものが少くないが、また価値の低いものも混在しており、今後は優良個体を中心に増殖を行うことが必要と考えられる。